

原 著

## 天使達の時：愛の可能性

橋 本 信 子<sup>\*1</sup>

### 要 約

アイリス・マードックの三つのゴシック小説の一つであり、10作目の作品である *The Time of the Angels* はオックスフォード大学での彼女の古典学の師 Eduard Fraenkel に捧げられている。ロンドンの霧に閉ざされ、廃墟の中に建つ館に住む Carel Fisher は神父でありながら信仰を失っている。彼はロンドンに転居して以来、その死に至るまで館から一歩も外に出ない。ロンドンという大都会にありながら、外部との接触を断った暮らしの中で、Carel は悪魔性を増し、その催眠作用で周りの人の意志を麻痺させ、自分の悪魔的欲望の餌食とする。メイドの Pattie は、Carel に支配され、三位一体のアイコンに象徴される Eugene とのイノセントな生活を諦める。美しい Elizabeth は催眠術にかかったかのように、次第に Carel の魔力に支配されるようになる。

Carel の娘 Muriel は Carel の魔力と必死で戦い、父から拒絶される。真実—Carel と Elizabeth との肉体関係、Elizabeth が Carel の実の娘であること—を知って衝撃を受けた Muriel は、館の外の世界に触れて安堵感を得る。Carel が redemptive love を期待した Pattie が、自らの意志で呪縛から逃れ去った後、死を選んだ父 Carel に対して redemptive love を成就させたのは Muriel だった。Carel の死後、父の罪—Elizabeth—を背負う Muriel と難民キャンプでのイノセントな奉仕の生活に喜びを見出す Pattie に、愛の可能性を見る。

娘と肉体関係を持つ Carel にはオイディプスの要素が、父に対して強い愛を持つ Muriel にはエレクトラの要素が見られ、*The Time of the Angels* はマードックが古典学の師に捧げるのにふさわしい作品である。

### はじめに

1966年に発表された *The Time of the Angels* はアイリス・マードックの10作目の作品にあたる。マードックは彼女のオックスフォード大学での古典学の師である Eduard Fraenkel<sup>†1)</sup> のアイスキュロスの *Agamemnon* の講義について、*The Agamemnon Class, 1939* という詩を発表しているが、*The Time of the Angels* は、マードックが敬愛するその師に捧げられている。

この作品の登場人物は極端に数が少ない。これはマードック作品には異例であると言っている。ロンドンに転居したばかりの神父 Carel Fisher とその娘 Muriel、両親が亡くなったため引き取られた Carel の弟の娘で姪の Elizabeth、メイドの Pattie、Carel 一家がやってくる前からそこに住み込んでいた用務員の Eugene とその息子 Leo、何度拒絶されても諦めずに、社会と隔絶されたかのように固く閉

ざされた神父の館を訪れる3人の来訪者—Carel の弟 Marcus、元校長の Norah、教区から派遣されているソーシャルワーカーの Anthea—が主な登場人物である。館の中の様子が一切分らないだけに、この3人の来訪者の不安は高まってくる。

マードックは年代順に *The Bell*、*The Unicorn*、*The Time of the Angels* と、ゴシック小説を三作発表しているが、Dorothy Winsor はこれらのゴシック小説は後になるほどより危険な性的願望を孕み、愛の可能性は低くなっていると指摘している。<sup>1)</sup> しかしマードックは愛が最も大切なテーマだとして “After all, love is the most important subject of all.”<sup>2)</sup> と述べている。この閉ざされた館の中で一体何が起きているのか、また作中人物が抱く危険な性的願望と愛の可能性について以下で考察してみたい。

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科  
(連絡先) 橋本信子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

### 廃墟の中の館

爆撃を受けて廃墟となったロンドンの教会に、著名な建築家の手になる塔と神父の住む館が僅かに残されている。周囲から隔絶された神父の館がこの作品の舞台である。礼拝堂は破壊されてしまっているため、ミサが執り行われることはない。つまり、もはやこの建物は教会としての機能を果たしていない。このことは、神父である Carel の精神状況—信仰の喪失—を暗示しているかのようである。Carel は、この館に引っ越してきて以来、その死に至るまで、この住居から一歩も外に出ることはない。コルセットをはめて体の不自由な Elizabeth は、物語の最後に、抱きかかえられてタクシーに乗せられて館を後にするまで、館の外へは無論のこと、自分の部屋からさえ一歩も外に出ていない。この館のドアは訪問者に対していつも固く閉ざされている。住み込みのメイドの Pattie は Carel から「一切誰も入れてはならない」と厳命を受けて、その命に忠実に従い、訪問者を撃退する。Carel は来訪者を拒絶するだけでなく、手紙に対しても返事を書かないどころか、読むことさえしないで、完全に社会との交渉を断っている。ロンドンという大都会にあって、これほどまで人との接触を断とうとすることに、この館の暮らしの異様さが表れている。

雪が降り積もった厳しい冬の寒さ、滅多に晴れることのない濃い霧、周辺がひと気のないことなども、このゴシック小説の背景として重要なことである。

Pattie は越してきた翌日、周辺には何の建物もないことを知って驚く。いかに荒涼とした寂しい環境にこの館が建っているかは、次の一節から明らかである。

Venturing out on the second day she had, to her surprise, been unable to discover any other buildings in the vicinity. . . . there was nothing to see except the small circle of pavement on which she stood and the red brick façade of the Rectory, furred with frost. The side wall of the Rectory was of concrete, where it had been sliced off from another building during the war. . . . Walking along a little further she found herself in a waste land. There were no houses, only a completely flat surface of frozen mud, through which the roadway passed, with small humps here and there under stiff frozen tarpaulins. It seemed to be a huge building site, but an abandoned

one. . . . Frightened of the solitude and afraid of losing her way she trotted hastily back to the shelter of the Rectory.<sup>12)</sup>(17-18)

さらに、この館に越してきた Carel を除く住人は皆、とりわけ Pattie が、昼夜の別なく走る地下鉄の騒音に悩まされている。地中から響いてくる地響きのような音によっても、彼らの不安な精神状況が暗示されている。後に Elizabeth が地下鉄の音が気にならなくなったことが述べられるが、それは Carel との関係の深化を暗示している。

マードックはこの作品の風景や天候は登場人物と同じくらい重要であり、ことに霧は欠くことのできないものであるとして、次のように述べている。

Scenery and weather are almost as an important as characters to me — the fog was vital for that book[ *The Time of the Angels*].<sup>3)</sup>

### メイドの Pattie

アイルランド人の母とジャマイカ人の父との間に生まれた住み込みのメイドの Pattie は、不幸な生い立ちの人である。Pattie の母親は Pattie を妊娠した時も腹の中の子の父親が定かには分らず、生まれた赤ん坊のコーヒー色の肌を見て、赤ん坊の父親がジャマイカ人の男だったことが分ったというような暮らしぶりの人だった。そんな母親に赤ん坊の養育は難しく、Pattie はまもなく孤児院に入れられてしまう。やがて母親は再び身ごもって妊娠中に亡くなってしまい、Pattie は天涯孤独の身になる。気の毒な境遇の彼女に対して、無視する人はあっても苛めるような人はなく、人々は彼女に親切に接したが、彼女の孤独は癒されようもなく、極度の愛への渴望のため彼女は周りの人から知恵遅れの子供のように思われた。孤独の中で、彼女は顔はおるか名前さえ知らない父の祖国ジャマイカの音楽や砕ける海の波を思い浮かべた。成長すると肌の色を意識するようになり、学校で学んだ詩の一節 “I am black, but oh my soul is white” (22) にひどく傷つき、幼い時母の愛に包まれることによって育まれた誇りから、もしも自分に心があるとすれば、カプチーノより少し濃い “creamy brown” (22) だと内心想う。

知恵遅れと思われるほど不幸だった Pattie の二番目の奉公先が Carel の家庭だった。Pattie と Carel との出会いは次のように運命的なものだった。愛を知らない Pattie はあっという間に Carel の虜になる。

She entered into Carel's presence as into the presence of God, and like the souls of the blessed, realized her felicity not through anything which she distinctly saw but by a sense of her own body as glorified. Carel immediately touched her, he caressed her, he loved her. Indeed Pattie's dazed senses could scarcely have distinguished these things from each other. Carel took her into his possession with a beautiful naturalness and tamed her by touch and kindness as one might tame an animal. . . . For a year Pattie laughed and sang. . . . Pattie felt she could have been happy so forever. And then one day, with the same beautiful naturalness, Carel took her to bed.(23-24)

Pattieが家中の人から愛された幸せな期間は長く続かなかった。Carelとの関係が家族に知れると、家の空気は一変し、彼女は冷たい視線に晒されるようになる。Carelの妻 Claraは夫の不実を悲しんで病に伏し、亡くなってしまう。しかし、Pattieは Claraの死を悼むこともせず、頭をあげて Carelが約束してくれた Mrs. Carel Fisherになる日を待っていた。しかし Carelは心変わりし、Pattieにその日がくることは結局なかった。やがて Carelが Pattieとベッドを共にすることもなくなってしまった。しかしそれで Pattieが自由の身になったというわけではなく、Carelがその気になりさえすれば、いつでもその身は Carelに自由にされる状態、いわば奴隷のような状態に置かれている。Carelの元を去ろうと思うこともあるが、それは鳥になって壁を越えたいと願う囚人の夢のようなもの “a prisoner's dream of becoming a bird and flying over the wall,” (27) と思い、Pattieはもはや自分には普通の生活は出来ないのだと思っている。

以前の任地では、Carelは変わり者だと思われてはいたものの、受け入れられていて、そこでは彼女も普通の人でいられた。ロンドンへの転居は二人の関係を崩壊させるのではないかと彼女は恐れた。ロンドンへの転居後の Carelの極度に人との接触を嫌う様子に彼女の不安は高まる。彼女は Carelの心の中で起きている変化—信仰の喪失—を感じとっている。“guilt”の念を感じたままの暮らしの中で、Pattieの信仰もイノセントさを失い、型どおりの祈りをする日々になっている。

### Carel と Marcus との対話

この閉ざされた館を何度訪問しても Pattieに追いつかれ、それでも諦めきれず強行突入して館の中に侵入するのに成功したのが Carelの弟の Marcusだった。石炭小屋から侵入し、その小屋から館に通じるドアに Pattieが鍵をかけ忘れていたため、侵入に成功したのだ。石炭まみれで真っ黒になり、石炭の臭いをプンプンさせた Marcusが忍び込んだ館は、停電のため真っ暗闇だった。マッチを擦ったため Pattieに見つかった Marcusは、やっと念願の Carelとの対面が叶う。二人の会話は真っ暗闇の Carelの書斎で行われ、さながら地獄での悪魔との対話のようである。

Pattieの不安通り、Carelは「神を信じていない」と Marcusに告げる。「君も知っての通り、今の時代、神を本当に信じている知識人などいないよ」 “You are the one who knows that in this age no intelligent person really believes in God.” (75) と、信じていないのが当然という口調で Carelは語る。

Marcusが Elizabethに会いたがっても、「私も彼女も君とは別の世界に住んでいる」「私達は互いに話すことはない」と Marcusを不安にさせる言葉に加えて、真っ暗闇の中で声だけが聞こえてくる尋常でない状態と、闇の中で聞く地下鉄の轟音に Marcusは一層不安をかきたてられ、闇の中で体のバランスを保てなくなり、遂には叫び声をあげてしまう。今まで面会を拒絶され続けてきたため、Carelに会いさえすれば自分の不安は消えると思い込んでいた Marcusだったが、結果はその逆で、この暗闇での対話以降、彼の心は安らぐ時がない。闇での対面以降、Marcusの心の中で大きな変化が起きた。

暗くして見ることが出来なくなった Carelの顔は怪物のような顔ではなかったかという恐れに取り付かれた上、結局会うことが叶わなかった Elizabethのことが一層気掛かりになってくる。夢の中で Carelと Elizabethが二人一緒に現れるようになり、二人を別々には考えられなくなる。この夢は Carelと Elizabethの性的関係を暗示している。

Carel and Elizabeth haunted his dreams, huge obscure figures whose doings he could not afterwards remember. Hitherto he had at least been able to think of them separately. Now in some compulsive way which he could not quite understand he thought of them together, . . . Her image burnt in his mind, a steely dazzling point of pure innocence. . . . What he felt was very much

more like some sort of monstrous jealousy.  
(86-87)

ここで Marcus が感じている激しい嫉妬は、孤児となった姪に対する後見人としての気遣いとは本質的に異なる、Elizabeth を女性と意識してのものである。これは Marcus が今まで意識することのなかった感情である。

後見人としての務めを怠っていたことを反省し、Elizabeth に花を贈るが返事がなく、Marcus の不安は高まる。そして、彼女の顔をはっきりと思い浮かべることにも出来なくなる。

Elizabeth turned and turned, a figure in a dark veil becoming a cocoon of darkness. He could no longer visualize her face. Some cloud had drifted across her image.(118)

さらに、神殿で情を通じて、罰として怪物の姿に変えられたというメドゥーサの姿に Elizabeth が変身しつつあると Marcus が思い浮かべることが、Elizabeth がそのような行為を犯していることを示唆している。

The innocent and sweet girl that he remembered was in danger of becoming in his imagination a Medusa.(166)

電気修理工が帰った時に Pattie が鍵をかけ忘れたため偶然に実現した Marcus と Carel の二度目の会見で、Carel は “If there is no God it is my vocation to be the priest of no God.”(168) と言い、“When I celebrate mass I am God.”(173) と平然と言っている。

信仰を失ったという Carel の言葉に不安を抱いた Marcus は主教を訪ねる。安心させてくれる言葉を期待していたが、「時代の変化と共に教会も変わる必要がある」という次のような主教の返事は Marcus には期待はずれのものだった。

Much of the symbolism of theology which was an aid to understanding in earlier and simpler times is, in this scientific age, simply a barrier to belief. It has become something positively misleading. . . . The outward mythology changes, the inward truth remains the same.(90)

自分が信じていないことは棚上げして、他の人には今まで通り信じていて欲しかった Marcus は、何もかもが変わりつつあることを感じて恐怖感を抱く。彼はこの主教の言葉に、「もしも、真実が恐ろしいものだったら・・・」と次のように述べる。

But suppose, suppose the truth about human life were just something terrible,

something appalling which one would be destroyed by contemplating?(92)

Marcus のこの言葉は一笑に付されてしまうが、彼の予感どおり恐ろしい真実がやがて暴露される。Zohreh Sullivan がゴシック小説は “the collapse of the traditional value”<sup>4)</sup> を示していると指摘しているように、この作品全体には底流に、信仰の喪失とそれに代わり得る確固としたものがないことへの不安がある。

#### 共謀者達

Carel の娘の Muriel も父と同様に人を避けたくて、電話がかかっても不在だと断るよう Pattie に頼む。Muriel も従妹の Elizabeth も気位が高く、いわゆる常識的な世間の人を見下したところがあり、Clara の死の原因となった Pattie には敵意を抱いている。この二人は早くから信仰を失っており、年上の Muriel が病気の Elizabeth の世話をしながら、Pattie の世話になることなく暮らしている。

幼い時からいつも一緒に、隠しだてなく過ごしてきた二人の関係は “perfect” なものだった。しかし、美しい盛りを迎えた最近の Elizabeth の変化、つまり “the increasing apathy” や “the slight withdrawal of warmth” に Muriel は不安を抱くようになる。詩作に熱心な Muriel が自作の詩について批評を求めても、Elizabeth はありきたりの言葉しか返さず、ぼんやりと日々を過ごしている。しかし、時折ちらりと垣間見える Elizabeth の性格の強さに Muriel は驚かされる。

Elizabeth had for so long played the gay child, the sunshine of the house. It startled Muriel to find herself, as she now regarded the drowsing entranced head, seeing something different, something even a little alarming. La Belle Dame sans Merci.(97-98)

このような思いも、霧に閉じ込められているせいで自分の頭が少しおかしくなっているのだと、Muriel は直ぐに払いのけてしまう。

Elizabeth のことを心配する Muriel の心の内を見透かしたかのように、Elizabeth のことで話があると、Muriel は父から呼ばれる。書斎の薄暗がりで見えた父の顔は、尋常の人には見えず、Muriel は身震いする。

. . . a face such as one might find in a remote mountain cave, belonging to some inaccessible indifferent hermit of an unknown

faith, of a faith beyond faiths. Muriel shivered.(127)

Muriel は父を恐れている、何故か父の前ではいつも自分に非があるように感じて、父の顔をじっと見ることが出来ない。Carel は開口一番、仕事は見つかったかと尋ねた。この質問はこの後も、繰り返される。詩作に没頭している Muriel は、仕事を探しているふりをして、探す気はない。父のこの質問を真剣に受け止めていない彼女は、この質問の真意—Muriel をこの家から出て行かせる—が理解出来ていない。

Carel は本を読むことさえしなくなった最近の Elizabeth について、「日に日に現実には彼女にとって意味がなくなっている」と言う。父と話しながら Muriel は非常な眠気に襲われる。「She felt drowsy, stifled and frightened.」(129) そんな Muriel に Carel は “She[Elizabeth] is our treasured possession. Our joint possession.”(129) と畳み掛けてくる。父の言葉に Muriel は心の中で必死で抵抗する。

Muriel felt, I must resist this. She was being taken into some kind of plot, enlisted in some unspeakable alliance.(129-130)

Muriel は思わず、「No, no, no.」と声を出して言ってしまう。転居のための疲労と、人に会うことのない寂しさのせいで、Elizabeth は眠ったような無気力状態にあるのだと Muriel は抗議するが、Carel は夢遊病者を起こすと重大な結果を招くと、次のように言う。

Elizabeth is a dreamer who weaves a web. That web is her life and her happiness. It is our duty, yours and mine, to assist and protect her, to weave ourselves into the web . . . (130)

Elizabeth には完璧な静けさが必要だから、今まで以上の配慮でそのような生活を保障しよう、Muriel は迫られ、無理やり約束させられる。「We have a precious possession which we must guard together.」(131) という父の言葉に Muriel は抗議して、叫びだしたかったが、沈黙せざるを得なかった。

Louis Marts は「Carel は身近の人の意志を働かなくさせる能力を持っている」<sup>5)</sup>と述べているが、それは Muriel が最も恐れていたことだった。抵抗は出来なかったが、Muriel が自分の意志を完全に失ってしまったのではないことは、父と Elizabeth のことを話した後の Muriel の気持ちに表れている。

She had been subjected to a strong pressure. Carel had used authority, and though

he had uttered no specific threats it was an authority with a menace in it. Yet what could he threaten her with? Muriel felt she was in danger of losing touch with reality. . . . She was frightened of Carel, she was frightened of disobeying Carel. But she was even more frightened of something else, of an isolation, a paralysis of the will, the metamorphosis of the world into something small and sleepy and enclosed, the interior of an egg. She felt as if Carel had tried to recruit her for some diabolical plot, or rather to hypnotize her into a sense of its inevitability.(136)

Muriel は今までの自分を反省する。何の疑問も抱かず父に言われるままに、Elizabeth に社会と隔絶された生活を送らせて来た自分は、ひょっとして父の計画の共謀者になっていたのではないかと思う。Elizabeth の病気を理由に静かな生活を送らせる必要があるという父の考えに一度も疑念を抱かず従ってきた、いやむしろ率先してそのような環境を作ったために、Elizabeth を今のような “alarmingly drowsy and entranced” (136) にさせてしまったのではないのだろうか考える。Elizabeth だけでなく自分自身も囚われの身 “she was herself a captive,” (102) ではないかという不安を持っていた Muriel にとって、Elizabeth を目覚めさせることは、自分の “her own self-preservation” (158) に関わることだった。父の言いつけにそむくのは怖いけれど、これ以上世間と隔絶された生活を Elizabeth に続けさせるべきではないと思うようになった Muriel は、これを打ち破る過激な行動を取る必要があると考える。その過激な行動とは、外の世界に対して閉ざされているこの館のさらに奥の Pattie さえ入れない、そしてこの家のために働く Eugene とその息子の Leo にはまだその存在さえ知られていない、社会から二重に閉ざされた Elizabeth の部屋に Leo を連れて行く事だった。

父と話す間に Muriel が払いのけるのに苦労した眠気は Carel の魔力のせいである。Muriel は気付いていないが、最近の Elizabeth の変化—ぼんやりと半ば眠っている状態で何事にも無関心—は Carel との接触を暗示している。Muriel には父の催眠術のような魔力から逃れようとする意志がまだ残っているが、Elizabeth は完全にその魔力に支配されている。Elizabeth のぼんやりと眠っているような状態がひどくなることは、Carel との肉体関係が深まっていることを示している。

Elizabethの部屋の隣のリネン室から Muriel が覗き見た、鏡に映ったベッドの中の Elizabeth と父の姿は衝撃的だった。父から家を出るようにと申し渡された Muriel は、Elizabeth が父と共謀して自分を追い出そうとしていることを知る。二人の関係を知った Muriel がこの視点から今までのことを見直すと、すべてが違って見える。Muriel は “How very alike they are, Muriel thought for the first time in her life.” (182) と、二人がよく似ていることに初めて気付く。かつては Carel の秘書役を務め、手紙の返事を書いていた Elizabeth が、花束にも手紙にも返事をしなくなって、社会との繋がりを断とうとしているのは、Carel と全く同じで、二人は既に同化しつつある。今まで victim だと思われていた Elizabeth は悪魔的 Carel の共謀者となって、Muriel を家から追い出そうとする。

#### 父の娘 Muriel

父を恐れ、父をクリスチャンネームの Carel と呼ぶことが出来ず、Elizabeth が父を Carel と呼ぶたびに違和感を抱いていた Muriel が、生まれて初めて大声で何度も Carel と叫んだのは、父を守るためだった。たまたま鍵がかかっていたため家に入ってきた Marcus が、Elizabeth に会おうとして Elizabeth の部屋のドアを開けようとした時、父と Elizabeth がその部屋で一緒にベッドにいるのを盗み見たばかりの Muriel はショック状態にありながらも、叔父に現場を押さえられないように、とっさにそのドアの前に立ちはだかって、“Carel” と大声で叫んで、父に危険を知らせたのだった。

もう一度 Muriel が父を Carel と呼ぶ場面は、家を出て行く彼女が置き忘れた睡眠薬を取りに戻って、その睡眠薬を一瓶全部飲んで眠っている父を発見し、起こそうとした時だった。今までは恐ろしい存在だった父の生死を決定する力は、今や彼女の手中にあった。助けを呼ばばまだ命を助けることは可能だったが、思い悩んだ末、父の意志を尊重して、Muriel は父をこのまま死なせることにした。死に瀕している父を前に、今まで気付くことのなかった感情が Muriel には湧き起こってくる。Pattie が去ったため死を選んだ父、Elizabeth のために自分を追い出そうとした父、死に際して自分にひと言の言葉も残していない父、そんな父を自分がいかに愛していたかを Muriel は悟る。自分と父との間には常に Pattie や Elizabeth が立ちはだかっていて、自分の父への愛は阻まれていたことを思い、もはや自分の愛を伝えるすべもなく、Muriel はとめどなく涙を

流す。

She loved her father and she had loved him only. Why had she not known this earlier? There had always been a darkness in her relationship with her father and in that darkness her love had lain asleep. If only there had been no Pattie. If only there had been no Elizabeth. If only there could have been just herself and Carel together. She seemed now so strongly to remember a time when it had been so. She had loved him so much. She could have made him happy, she could have saved him from the demons. But Elizabeth had always intervened. . . . She knew now that a special pain which Elizabeth had caused her, and to which she had become so accustomed that she scarcely noticed it, was the pain of jealousy. (221-222)

父への愛情から、父を生に呼び戻すことをしなかった Muriel は、そのことによって、永遠に父の罪—Elizabeth—を背負うことになる。

#### イノセントな普通の生活への憧れ

この作品中で唯一、明るい気分で描かれている場面は、霧も晴れ、降り積もった雪の中、Eugene が Pattie を川を見に連れ出して、求婚するくだりである。Eugene は現在はこの館の用務員に身をやつてはいるが、豊かな家庭に生まれ、幸せな子供時代を過ごした。革命を逃れ、難民キャンプを転々とするうちに妻を病で失い、幼い一人息子を苦勞して育てあげた。語るほどの過去のない Pattie は Eugene の話を Othello の話に耳を傾ける Desdemona のように熱心に聴き、心引かれる。

Eugene にとって、幸せな子供時代を過ごしたペテルスブルグの母の寝室にかけられていた三位一体を象徴する3人の天使の絵は何より大切なものだった。黄金に輝くこのイコンは唯一彼に残された幸せだった時代の母の形見の品だ。全編が暗い色調の中で、この黄金のイコンはイノセントさの象徴として、燦然と輝きを放っている。Eugene は “. . . he had become. . . an essential counterweight to Carel, the white figure against the black one.” (177) と表現されて、Carel に象徴される闇の世界と対比されているのは明らかである。

Eugene は子供時代の幸せと結びついている海を見たことがない Pattie を哀れみ、いつか海を見せて

やりたいと思っている。EugeneがPattieを連れて行った川は「海に近い」と述べられていて、Pattieが幸せの一手前まで近づいていることが示されている。PattieはCarelとの関係をEugeneには話せず、自分はEugeneにふさわしくないと悩む。その一方で、彼女の中でEugeneとのイノセントな暮らし“To be married, to be ordinary, to love in innocence.”(152)への憧れはふくらむ。

しかし、彼女の心のうちはCarelに見抜かれている。Pattieは再びCarelに犯され、Carelの闇の世界から解放されて、イノセントなEugeneを愛することは出来ないことを思い知らされる。Murielに約束することを迫ったと同様に、Carelは自分のためにはどんなことをも耐え、決して自分の元を去らないようにと身勝手な要求をし、Pattieに約束させる。約束を迫る次の言葉は謎めいたものだった。

Will you be crucified for me, Pattie? . . . There will be a trial, Pattie, there will be pain. . . . You might make a miracle for me, . . . You won't ever leave me, will you? . . . Whatever I do, whatever I become, you won't leave me? . . . 'Woman would like to feel that love can do everything, it is her special superstition.' But perhaps it is not a superstition. . . . I want to bind you in chains you can never break.(155-156)

謎の言葉に続けて、Carelは“You are my sugarplum fairy. Lucky the man who has the sugarplum fairy and the swan princess.”(156)と言う。この言葉こそ、PattieとElizabethの両方を愛人にして喜ぶCarelの悪魔性を示す言葉だが、Pattieは気付かない。Carelが絶えず聴いている音楽「白鳥の湖」は王子が呪いで白鳥に変えられたオデット姫と悪魔の娘を取り違えるストーリーのバレエ音楽であるが、Carelはこの音楽を聴きながら、PattieもElizabethもどちらも自分のものにしようとする悪魔性の人間である。

苦悩するMurielは心の中でイノセントなEugeneに救いを求め、それはいつしか恋心になる。しかし、彼はいつもPattieと一緒にいる上、Murielの好意はことごとく誤解されてしまう。Murielが救いを得たのはNorahからだった。

Marcusは二度館に侵入したが、Murielは二度館から外に出て、外の世界で安堵感を味わった。一度目は、Elizabethに一層の配慮をして静かな生活をさせるようにと父の書斎で言われた時のことで、自分の意志まで麻痺させられることを恐れたMurielは

家を出て、物思いに沈んで当てもなく歩いていて、偶然にNorahに出会う。常識的で世話焼きのNorahを煙たがり、会うことを避けていたMurielだったが、嫌々連れて行かれた、暖炉に火が燃える心地良いNorahの居間で、“a sense of relief”(139)を感じて、自分でも驚く。二度目は、父とElizabethの間の肉体関係を知って衝撃を受けたMurielが、Pattieから、弟のJulianがCarelが恋した女性と駆け落ちしたため、Julianへの恨みからJulianの妻を誘惑して産ませたのがElizabethで、恨みから産ませた自分の娘だからこそ関係を持つ必然性がCarelにはあったのだと聞いた時で、ショック状態のMurielは館を出て近くの電話ボックスからNorahに電話をかけ、Norahの声を聞いて大きな安堵を感じる。

Peter Conradiは、Murielのことを気にかけて館を度々訪問する元校長のNorahのモデルは、マードックの学んだBristolのBadminton校の校長Miss Beatrice May Bakerではないかと考えている。<sup>6)</sup>彼女を尊敬するマードックは、John Bayleyと結婚する前にも彼女に相談し、同意を求めたという。不安に揺れる登場人物の中で、Norahはいつも实际的で的確な助言を与え、人に惑わされることがない。

## 結 び

母と知らずに母と結ばれたオイディップ王と比べて、復讐のために産ませた自分の娘Elizabethと関係するCarelは、はるかに邪悪である。CarelはPattieにredemptive loveを期待したが、Elizabethとの関係を知ったPattieはそれを与えることができない。Dorothy Winsorは“There is, then, no source of redemptive love in the self-absorbed world of the Rectory.”<sup>7)</sup>と述べて、*The Time of the Angels*における愛の可能性については悲観的である。しかし、父から拒絶されながら、父への愛から、最後に父に尊厳ある死を与えたのはMurielであり、redemptive loveを与えられるのは唯一Murielである。父への愛ゆえに、誰にも助けを求めず、きっぱりと父の犯した罪、つまり病気で身体を奪われたエリザベスを一生背負い続ける覚悟のMurielは、Agamemnonの娘Electraを思わせ、この作品は古典の師Eduard Fraenkelに捧げられるに相応しい作品である。

我々がこの作品から愛について楽観的な結論を引き出すことは難しいかもしれないが、父の罪を受け取るMurielの覚悟、ElizabethとCarelの関係を知り、自らの意志でCarelとの呪縛の鎖を断ち切り、悪夢のような館から逃れ、難民キャンプで働くことに喜びを見出すPattie、Carelの死後、取り壊しが

決まって Muriel も Elizabeth も去り、ひと気のなくなった館で一人すすり泣く Anthea の姿に、報いを求めない純粹の愛の可能性を見出すことができる。館を毎日訪れながら最後まで Carel との面会が叶わなかったこの Anthea こそ、Carel, Marcus, Julian の三兄弟が同時に恋をし、この恐ろしい物語の発端となった人間である。

榎本真理子は *The Sea, the Sea* を批評して「確かにマードックは人間を他者との深い関わりあいの中で描くことができているし、・・・しかし、直接的現実的に、社会や人間を描き出すリアリズム小説

のみが小説のすべてではない。寓話的であったり、一見ひどく荒唐無稽に見える物語が、結果として社会や人間の本質について読者に何かを効果的に語りかけてくることも往々にしてあるものだ<sup>8)</sup>と述べている。*The Time of the Angels* にもこの批評は当てはまる。他者との関わりを強硬に拒絶するところには不毛で悪魔的なものしか生まれず、人との関わりの中でこそ愛が生まれることを、この作品は教えてくれる。マードックはこの作品の中でキリスト教の非神話化を語っているが、彼女のこの作品自体が新たな “myth” を生み出している。<sup>9)</sup>

### 注

- † 1) 1977年に発表されたこの詩は、共に Eduard Fraenkel の講義を受講し、後に戦争中に捕虜となり、射殺されるという非業の死をとげたマードックの恋人、Frank Thompson に捧げられている。Conradi PJ: *Iris Murdoch: A Life*. Harper Collins, London, 121, 2001.
- † 2) Murdoch I: *The Time of the Angels*. Vintage Classics, Vintage, London, 2002.  
この作品からの引用は、本文中に数字で示す。

### 文 献

- 1) Winsor DA: Solipsistic Sexuality in Iris Murdoch's Gothic Novels. *Renascence*, **Autumn**, 53, 1981.
- 2) Nettle S: Iris Murdoch: An Exclusive Interview. *Books and Bookmen*, **11**, 14, 1966.
- 3) Nettle S: Iris Murdoch: An Exclusive Interview. 14.
- 4) Zohren TS: Iris Murdoch's Self Conscious Gothicism: *The Time of the Angels*. *The Arizona Quarterly*, **Spring**, 50, 1977.
- 5) Louis M: Murdoch's London Novels. *Iris Murdoch: Modern Critical Views*. Ed. Harold Bloom, Chelsea House, New York, 52, 1986.
- 6) Conradi PJ: *Iris Murdoch: A Life*. Harper Collins, London, 59, 2001.
- 7) Winsor DA: Solipsistic Sexuality in Iris Murdoch's Gothic Novels. 62.
- 8) 榎本真理子: イギリス小説のモンスターたち: 怪物・女・エイリアン. 彩流社, 東京, 265, 2001.
- 9) Nettle S: Iris Murdoch: An Exclusive Interview. 66.

(平成16年11月20日受理)

***The Time of the Angels : Possibilities for Love***

Nobuko HASHIMOTO

(Accepted Nov. 20, 2004)

Key words : Carel Fisher, fog, rectory, jealousy, darkness

**Abstract**

*The Time of the Angels*, Iris Murdoch's tenth and one of her three Gothic novels, is dedicated to her Classics mentor at Oxford University, Eduard Fraenkel. Carel Fisher, who is a priest but does not believe in God, lives in a secluded rectory in foggy London and never comes out of it until his death. With first Pattie, and then Elizabeth, Carel's demonic power grows, and he annihilates the will of the two women and controls them. Only his daughter Muriel fights against his demonic power and is refused by him.

When the truth—an affair between Carel and Elizabeth, and the fact that Elizabeth is his daughter—is disclosed, agonized Muriel finds great relief in Norah's common and ordinary life. Pattie, from whom Carel expects redemptive love, finally leaves him and finds happiness in working for refugees. When Muriel has the power of life or death over her father she realizes how deeply she loves him. So she lets him die a dignified death, which causes her to take all the responsibility for her father's sin upon herself and to take care of sick Elizabeth for the rest of her life. We cannot be too optimistic about love in this novel but we will find some hope for love in Muriel and Pattie.

Carel commits a crime of incest like Oedipus. Muriel deeply loves her father like Electra. *The Time of the Angels* is a suitable novel to be dedicated to her Classics mentor, Eduard Fraenkel.

Correspondence to : Nobuko HASHIMOTO Department of Medical Welfare, Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.14, No.2, 2005 229–237)